The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	遊び、生の未決定性を快楽にする形式 : 雑誌の恋愛言説における人間関係から
Author(s)	谷本, 奈穂
Citation	年報人間科学. 1999, 20-2, p. 439-457
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12464
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

遊び、生の未決定性を快楽にする形式

――雑誌の恋愛言説における人間関係から――

谷本　奈穂

〈要旨〉

人間を関係づける重要な契機として恋愛が挙げられる。そこで、本稿は、恋愛言説における人間相互の関係性を考察するものである。

恋愛における関係性は、理論的研究においては、「他者を求めるもの、アイデンティティを保証するもの」として語られている（一九八〇年の雑誌言説もこれに沿う）。

だが、一九九二～一九九四年の雑誌言説は、理論的研究の恋愛概念だけでは説明できない傾向を有していた。それは、人間同士の固定した関係を回避し、そして、そのような未確定な関係から得られる喜びを描くという部分である。それは、単に他者を「求める」というより自分と他者の間を「ゆれる」ものであり、「アイデンティティを保証する」というよりは「アイデンティティを確定しない」ものである。

この未確定な関係における「遊戯性」は、既存の理論でも類似したものがあるが、それらと同じものでは決してはない。とはいえ、この遊戯性は、現代的で新しい傾向というより、もともと恋愛の関係に存する一側面であろう。それは、ジンメルの言葉を借りれば「生の未決定性を快楽にする形式」なのである。したがって、これから、恋愛のそういった側面に分析をくわえることが求められる。

キーワード

恋愛　言説　関係　未確定　遊戯

「生は、それらに対する一つの関係を明快に拒否できないような事象に対して、先天的に確固とした明白な立場をもっているのではないということは、生の問題性の一つである（ジンメル）」

「心理生活の中には随意的なもの、未決定なものは一つもない（フロイト）」

1　恋愛言説の中の人間関係

多くの人が「人と人との関係」に興味を持ったことがあるだろう。恋愛という事象は、学問として扱うには軽薄なものに見えても、人と人とを関係付ける一つの契機であり、重要なものである。それは、多田道太郎（一九九四）の言葉を借りれば、「社会の核心」に迫るものといえる。そこで、恋愛を分析対象に採り上げてみたい。本来ならば、フィールドに出て恋愛に関する調査を行い、「実際の」人間関係を探ることも有効な方法であろう[1]。だが、本稿では現代の恋愛に関わる「言説」を検討し、その特徴を抽出していくことにする[2]。

言説研究の意義として、「言説」と「実際」の恋愛（及びそれにまつわる人間関係）に再帰的な関係があることを挙げることができる。それはどのような関係なのかというと、一つには、言説によって人々の行為や事象自体が変化していくという関係である。このことは、ギデンズ（一九九一）が指摘している。彼によれば、雑誌や新聞の記事、専門家の文書、テレビやラジオで議論された事柄は、それらが記述している現象を不断に再構築していくという。もう一つには、それらの言説が、現実の現象そのものを描いてなくとも、（そういった現象を生みだしていく）人々の信念や願望を反映しているという関係である。もし反映していないものであれば、それらの言説は人々の間で受容されないはずである。特に、雑誌の恋愛記事は、アンケート・インタビュー・投稿から成り立っており、恋愛の実際のもの「らしい」形を提示する。この「らしさ」の中には、人々が持つ「恋愛とはこのようなものだ」という信念、「こうであって欲しい」という願望が反映されやすい。編集側の意図や意向に関わらず、信念や願望が含まれている雑誌記事ほど、読者に好まれると考えられる。これらの双方向的な関係、つまり、一般に普及している言説が人々の信念や願望を反映し、同時に、その言説によって現実の事象が変化していくという関係があることから、言説研究は社会的なものを探る上で意義のあるものだといえる。

しかし、「言説」と「実際」の恋愛の間に再帰的な相関があることを本格的に述べるには、稿を改める必要がある。したがって、ここでは示唆するにとどめ、本稿での考察はあくまで「言説」に関する議論に限定する。そして、恋愛言説の考察は、「実際」の恋愛における人間関係を探ることの準備段階として位置づけておく。

2　分析手続き

言説分析の対象として雑誌記事を選択する。①信念や願望が含ま

れている雑誌記事ほど、読者により受容されているという考えに基づき、『出版年鑑』（一九九四）から、発行部数が多い雑誌をピックアップする。その上で、対象年齢層が一五～二五歳のものを選択する。もちろん、恋愛に年齢制限はないのだが、ここでは、より「現代的な」言説を分析したいので、青年層を対象にした雑誌を選ぶことにする。②一九九二～一九九四年の、男性誌の『週刊プレイボーイ』一二冊（集英社）、『メンズノンノ』一八冊（集英社）、『ホットドッグプレス』八冊（講談社）と、女性誌の『ノンノ』一五冊（集英社）、『アンアン』八冊（マガジンハウス）、『JJ』八冊（光文社）の計六九冊を調査する[3]。恋愛記事は計八四五頁である。③KJ法により[4]、文章を記事単位で区切り、各々の内容に応じてまとめた[5]。その作業は全て、筆者を含む数名によって行われている。分類した言説のうち「人間相互の関係性」について着目する。「人間相互の関係性」は全体の約一割程度を占めている。④以降では、一九九二～一九九四年を九〇年代と略し、九〇年代の言説の抜粋は【……】で示す。

具体的な議論は以下のように進める。恋愛に関わる九〇年代の雑誌言説の特徴を抽出するのが本稿の主たる目的であるが、まず、比較対象として、恋愛における関係性は学術的にどのようなものとして語られてきたかを見ておく。これは次の九〇年代の言説の特徴を明確にするためである。次に、九〇年代の雑誌記事から現代の言説の特徴を抽出する。最後にそれらのズレを検討していく。

3　恋愛に関する学術的研究からの言説
～他者を求め、アイデンティティを保証する関係～

(1)他者を求めるもの

学術的研究においては、恋愛における人間関係はどのように語られてきたか[6]。ジンメル（一九二三）は「われわれは、われわれの心の中に、われわれ自身の感情の中に、他人を求める。このように求めることが愛と呼ばれる」と述べている（訳書、一四〇頁）。すなわち「相手を欲すること」、これが恋愛の根本にある、というのである。この概念は我々にとって分かりやすいものであろう。その他の論者も同様に語っている。山田昌弘（一九九四）は、恋愛の基礎となるのは、他者に近づいて、より密なコミュニケーションを欲する気持ちであるとしているし、橋爪大三郎（一九九五）は、愛の根本に他者の身体を求める自分の身体のダイナミズムがあると見ている。更にバルト（一九七七、訳書、三三七～三三八頁）も「二人が互いを絶対的に所有すること…（中略）…それは歓喜の合体、愛の歓喜なのだ」と述べている。このように、学術的研究において、恋愛における人間関係は「人間の他者を求める情動」によって構成されるとされてきた。

(2)アイデンティティを保証するもの[7]

また、恋愛関係は「アイデンティティを保証する契機」としても語られる。

他者を通して自己を知るというテーゼは、よく語られるものである。もう少し順を追って見ていこう。まず、アイデンティティと「対人関係」の関連を見てみよう。そもそも、エリクソン（一九六八）によれば、アイデンティティとは「生ける斉一性と連続性との主観的感覚」である。そして、それは、従来の精神分析学に則れば「個人」の人格的成長に核心を持つものとされていた。だが、エリクソンは「対人関係」や「共同体」といった社会的側面にもアイデンティティの核心があると考えた。彼のこの考えは、今では広く支持されている。つまり、アイデンティティは「対人関係」と関わるものなのである。次に、アイデンティティと「選択」の関連を見ていこう。例えば、ギデンズ（一九九一）は、モダニティにおいて個人の選択が重要であることを指摘している。すなわち、モダニティにおいて個人は多様化した選択肢に直面し、その中で個人が日々の決定を選択することによって、自己のアイデンティティは決定されていくという。鑪幹八郎（一九九〇、一八〇頁）は「『選択』を可能にする自我の力こそアイデンティティである」と断言さえしている。

こうして、アイデンティティが、「対人関係」及び「選択」を重要な契機にもつとすれば、「どのような他者と親密な関係を結ぶか」という選択決定もアイデンティティに直接関わってくる問題になるはずである。

事実、吉澤夏子（一九九六、七四頁）は「誰をどのように愛するかということが、その人が何であるかを決定する」と考えているし[8]、スウィドラー（一九八五）も「自己を見出すというのは、一人ですることではない。……他者との関係に入らねばならないと考えられている。そうした関係のうちでもっとも重要なものは、愛と結婚である」と述べている（訳書、一〇二頁）。ここで再び、エリクソン（一九五九）の議論に戻ってみよう。彼は「アイデンティティの感覚」を、人との関わりの中で自分を見つめることであると考え、更に、その「アイデンティティの感覚」を保証するような他者との融合を、「親密な関係」と捉えている。もちろん、恋愛関係は「親密な関係」なので、恋愛関係のなかで人間のアイデンティティ感覚は確立していくことになる。だから、エリクソン（一九六八）も、青年の恋愛を「拡散した自己像を恋人に投射することにより、そしてそれが反射され、徐々に明確化されるのを見ることによって、自分のアイデンティティを定義づけようという一つの試み」と考えるのである（訳書、一七一頁）。以上のことから、「恋愛」は、他者との関わりの中でアイデンティティを保証していくものとして語られているといえる。

(1)(2)の議論から、理論的研究において、恋愛は「他者を求めるプロセス」であり、「自己のアイデンティティを保証できる契機」として語られてきたとまとめることができよう[9]。

4　九〇年代の雑誌言説の分析
～未確定な関係・遊びの関係～

(1)「遊び」、あるいは「遊戯性」

それでは、九〇年代の言説の特徴を見ていく。結論を先取りすれば、九〇年代の言説は、学術的研究の恋愛概念では説明がつかない傾向を有している。そのような傾向は幾つかあげられるが、本稿で重要なものは、人間関係を曖昧なままに保ち、そのような関係を楽しみ「遊ぶ」という傾向である。

ここでの「遊び」は「余裕」という意味に近い。周知のようにカイヨワ（一九五八）は遊びを①自由な活動②分離した活動③不確定の活動④非生産的な活動⑤ルールのある活動⑥虚構的活動として定義している。そして、彼は③不確定の活動に関して、次のように言う。「成りゆきがあらかじめわかっていて、間違いや驚きの可能性もなく、避けられない結果を明白にもたらすとしたら、それは、遊びの本質とは両立しない。遊びは、ルールの範囲内で自由な応手を発見し、直ちに発明する必要によって成り立つ。遊ぶ人のこうした自由、遊ぶ人の活動に許されるこの余裕部分こそ、遊びの本質をなす物であり、また、遊びが与える喜びの一部を説明するものである。……さらに、芸術家の遊びとか、歯車の遊びとかいった表現に見られる遊びという言葉の特異な意味深い用法を説明するのも、やはり、この余裕部分である」と（訳書、一〇頁）。また、アンリオ（一九七三）は遊戯行為の最も目立つ特性として不確定性を挙げている。その上で、「不確定性は、何よりもまず、未決定――実在的なものであっても想定されたものであっても、とにかく――行動のメカニズムの中にはさまり、ある程度まで行動を予測不可能にする未決定の余裕の幅によって生じる」と述べている（訳書、一二三頁）。

私は、彼らの指摘は非常に重要だと考える。そこで、本稿では、「遊び」及びその特性である「遊戯性」には、特に「不確定性」「余裕」という意味を強調しておきたい。それは、その気があればいわゆる「本気」の恋愛（スイッチON）にもできるし、いわゆる戯れの恋愛（スイッチOFF）にもできるものである。

その具体的な内容として、①友達以上恋人未満、②恋人ではない人とのセックス、③恋の気持ちが分からない、④他にもいい人がいる、⑤浮気、⑥さりげなさ・回りくどさ、が挙げられる。

(1) 具体的内容

①友達以上恋人未満

九〇年代の雑誌で非常に目立ったのは「友達以上恋人未満」の関係が心地いいという言説である。これは、互いの関係を未確定（曖昧）なままにするような「未確定な関係・遊びの関係」を直接的に表している。

＊記事の語り手である女性には、友達以上恋人未満の男性Mがいる。

【Mとは他の女友達には話せないことでも話せるし、…（中略）…気楽なんです。彼もそう思うのか、ヒミツとか彼女のグチを平気で言う…（中略）…つき合う対象という感じではなくて。かといって他の男性とも違う。普段は特別気にも留めていないんだけど、ときにはハッとする存在なんです。彼との関係は、何だかとても難しくてあまり上手には表現できない】（女性誌）

＊【一時期、好きという感情を持ったこともありましたが、恋人というより兄弟であったり姉妹である立場の方が居心地よく感じられて】。（女性誌）

＊語り手の男性には【異性の親友】がいて楽しくつき合ってきたが、他の男性と彼女がつき合いそうになり悔しいような複雑な気持ちになる。（男性誌）

以上のように、「友達以上恋人未満」とは、恋愛関係ではないが、それに近い状態を呼ぶ。その場合の相手に求められるものは、趣味や価値観、ノリといった「感覚的なもの」が合うことである。

＊【その彼とは本当に気が合うし趣味も似ていて、私にとっては恋人以上に大切だと思える存在なんです】（女性誌）

＊【友達以上恋人未満の彼が『彼氏ができたら遊べなくなっちゃうから、つくってほしくない』と言います。趣味も合うし、ずっと友達でいられるねって…】（女性誌）

＊語り手の女性（＝投稿者）は男友達のE君を好きになるが、別の男性にも惹かれて結局はその男性と付き合う。E君との関係は変わらないままだという。【恋人になりたいと思っていた頃に比べると、会いたい話したいとあまり強く思わなくなったし、ドキドキもしなくなりました。それでもE君とは価値観や趣味が似ているから、友情が成立している】。（女性誌）

＊【恋人がいない人は一緒に遊んだり、同じ場を共有できたりするグループ交際】にあこがれる】。（男性誌）

＊ある女性（語り手）と男性は【出会った頃にはお互い彼氏、彼女がいたのですが、気が合うので毎日のように】遊んでいた。その後、もともとの恋人とは別れ、語り手とくだんの彼とは同棲するのであるが、結局別れることになる。だが、別れて半年たった今も一緒に遊んでいるという。彼女はさらにまた別の男性と結婚する予定だが、【たぶん同棲していた彼とは友人として一生つきあっていくと思います。・・・お互いの短所も長所もよく知っているし、趣味が合うんですもの。】（女性誌）

「友達以上恋人未満」という関係にはもう一つのケースがある。それは、今は恋人になれない関係性を「友達」という言葉で保留するものである。恋愛感情を持っている側は、好意を持ってくれない人に、つき合いを強引に求めるよりも、「友達」という関係性を保ちつつ、恋人になる機会を待つ方が「安全」である。また、恋愛感情を持たれている側にとっても、相手の好意をひきつけておくことが可能であるし、つき合うかどうかを決めるまでの猶予期間にもなる。つまり、恋人になりたいと思う側と思われる側の両者にとって「友達以上恋人未満」という関係は、お互いの関係を疎遠にさせない予防線や、関係を進展させない防波堤になることから、それぞれメリットがあるものといえる。

＊【中学時代からの友人であるK君。ずっと私のことを思ってくれ

ていて、それに応えてあげられない私に『友達でいい』と言って、今でも優しくしてくれます。】（女性誌）

＊【以前つき合っている〝つもり〟になっていた大好きな人に『俺は友達だから』と、いきなり言われてしまったんです。…友達という言葉の可能性を信じて大切に過ごしていきたいと思います。】（女性誌）

＊語り手の女性は、恋人ではないが自分を理解してくれている男性からプロポーズされたが、その気になれず断る。しかし、その後も彼に依存するような関係を続けるのである。語り手は彼のことをこう表現する。【ただの遊び友達ではなくて、二人で濃い時間を過ごせる友人なのです。でも、もう一度彼にプロポーズされたら、受けるかも……。】（女性誌）

＊投稿者が恋愛感情を抱いた【みっちゃんにはすでに彼女がいたので、私は…最高の友達になりたい】と考えるようになる。【知らない人からは恋人同士に見えるかもしれません。…今以上の感情を相手に持ってしまったら、この関係は崩れてしまう…そんな危うい綱の上で私たちの関係は成り立っています。】（女性誌）

＊語り手（女）には、【本当はいつも気にかかる存在】である彼がいた。しかし、【彼には中学からの彼女】がいたので、【彼とは男と女とを越えるような友情を目指】そうとする。（女性誌）

以上から友達以上恋人未満とは、一つは、感覚的なものが合う異性との関係、もう一つは、保留された人間関係を指すといえる。そこには曖昧さ・未確定さをいやがるのではなく、むしろ楽しんでいるかのような部分さえ存する（それは単純に喜んでいるという意味ではなく、前述したような、未確定な関係性の中である種「余裕」を見つけだしているという意味において）。九〇年代の恋愛言説において最も特徴的なのが、この友達でもなく恋人でもない関係性の「揺れ」を享受するような部分であろう。

この「揺れ」を楽しめば楽しむほど、恋愛言説は「ゲーム」の言説に近づいていく。

＊恋人のいる男性と同じく恋人のいる【私】が、【お互い恋人がいるのを承知の上で遊ぶ】ようになる。【私の方】はそのうち恋人と別れてしまい、問題の男性とは【肉体関係ができてしまい、ますます情が移ってしま】うのであるが、その男性は恋人と別れる気はないようである。そして【私】は以下のように語るのである。【私がつきあっていた彼氏と別れたことは、言っていません。】なぜなら、【ルール違反になってしまう】からだという。【つらいけど黙って今の関係を続けたい。…（中略）…まだ若いのだから、彼に賭けてみようかと思います。】（女性誌）

＊【気を持たせてするっと逃げる女】が増えている。（男性誌）

②恋人ではない友人とのセックス

山田昌弘（一九九二）の調査によれば、セックスは、恋人と友人の区別をする一応のメルクマールとして機能している。しかし、異

性の友人と性交渉をもつという言説は多い。恋愛言説においては、「友達以上恋人未満」の関係が楽しまれているというだけでなく、恋人と友達の境界線自体が揺らいでいるといえるだろう。雑誌記事（九〇年代）を以下に記しておく。

＊【私には、少人数ながら男友達がいる。…ごくごくたまに、そのうちの一人とセックスをしてしまうこともあるけど、それでも関係は変わらない。友達という枠を超えて、身内のように思っている男友達とたくさん話をしていると、いろんなことを考えさせられる。】（女性誌）

＊【私にはある男友達がいて、彼を親友だと思っているのです。…男の人と一緒だといろいろなことが気になるけど、彼とならただ楽しく過ごせるんです。…私は、親友だと思っていた彼と普通にHしてしまったけど、何事もなかったように今までどおり話をしています。一度、彼に『私は（あなたを）親友だと思っているけど』っていったら、何をいまさらというように、『あたりまえだろ』と言われました。私たちにはお互いに彼・彼女がいます。】（女性誌）

＊ある女性が前から仲良くしていた男性の友人とセックスしてしまう。そしてこう述べる。【彼氏にだって（セックス）させなかった。不思議よね。でもそのときの私にとってはなんだかとても自然だった。】（男性誌）。

＊【俺（語り手）】にはYという親友がおり、YにはS子という恋人がいる。かつて、【俺】はYとS子を取り合った経緯があるが、今では【俺】とS子とは友達である。ところが、YとS子の間で別れ話がでた時、S子は【俺】に相談を持ちかけてくる。その時に【俺】とS子はセックスしてしまう。だが、結局、YとS子は別れず、恋人のままである（男性誌）等。

＊語り手（男）は合コンで知り合った女性とセックスし、その女性から電話がかかってくるようになる。【別に嫌じゃないけど、付き合う気はない】という。（男性誌）

なぜ、このような言説が多いのだろうか。確かに、恋愛感情と（友人としての）好意との違いは混同しやすいものである（社会心理学の分野で、その区別を何とか明確にしようとしているのは、もともとその区別がつけにくいからである）。だが、なぜ特に、恋人と友達の区別するメルクマールであるセックスを、あえて無効にするような言説が多いのだろうか。

一つには、そのような言説が、いわゆる「性の乱れ」として描くことができ、刺激的なおもしろさに満ちているからであろう。特に、男性誌では、恋人でない人とのアバンチュールをおもしろおかしく記事にしている。

二つ目には、性の神秘性がはぎ取られ、日常化している傾向からくるのであろう。例えば、雑誌の中でセックスを一種のスポーツと捉えるような言説も多い。事実、博報堂生活研究所（一九九四）の調査によれば、一九～二二歳の男女のうち「最初のデートで気持ちが合えばセックスしてもよい」と考える人は五七％にものぼり、セ

ックスは何も特別な儀式ではなく、日常風景の一コマにすぎなくなったのである。

より重要な三つ目の理由として、現実的に恋人と友達の区別が揺らいでいることを、言説が表していることも考えられる。つまり、一応のメルクマールであるセックスですら、絶対的に恋人と友人を区別するものではないということだ。この揺らぎは、一つには、異性と知り合う機会が増加していることから説明できる。【今の若い人達は恋人じゃないけどBF的存在の男の子が周りに何人もいる…（中略）…そのせいで恋人と、男の友達の差がつきにくくなってる（女性誌）】のであり、逆に、女友達が周りに多くいて、恋人と女友達の差がつきにくくもなっている。もう一つは、現代における恋愛に関する規範、すなわち「恋人とは〜のような存在だ」「〜なら友人だ」という規範がはっきりしていないことからも説明できる。山田昌弘（一九九二）によれば、一八〜二一歳の男女の九〇％以上に異性の友人がいて、約六〇％は恋人ではないけれどデートする友人がおり、「恋人でなければできないことは結婚ぐらいなもので、お互いに恋人と思わなくても、心を通わせたり、デートしてもよい（山田昌弘、一九九二、五五頁）」のである。

以上三つの背景をもとに、「恋人ではない人とのセックス」言説は多くなっているのであろう。しかも、最後に述べた「恋人と友達の区別の揺らぎ」は、上述した、①「恋人以上恋人未満」とも関わっており、未確定な関係性の中で「遊び」を見出しているといえる。

③恋の気持ちが分からない

恋愛における疑いといえば、相手の感情を疑うこととして一般に認識されている。例えば、草柳千早（一九九一）によると、疑いはsuspicion、doubutの二区分に分けられている。suspicionは相手から自分に呈示されている感情を本当ではないもの、偽りのものと疑うものであり、doubutは二人の関係に関する自己の経験のフレイミングと相手とのフレイミングの間のズレへの疑いのことである。このどちらも恋愛において「相手」の感情・認識を疑うことであり、事実、恋愛においてそれは頻繁に起こりうる。だが、ここでの疑いはそれではなく、「自分」の気持ちが恋情かどうかが分からないということである。

＊【押し切られて恋愛に踏み込むが、つき合ってからも自分の気持ちに確信が持てない】（男性誌）

＊【その人の自分に対する情熱にうっとりしてしまい、それが、何となくその人への愛情に繋がってしまう】（女性誌）

前述したように、山田昌弘によれば、現代は「恋愛規範」が揺らいでいる。だから、「恋愛とはどんなものか」、「恋愛感情とはどんなものか」、「どう感じれば恋愛になるのか」が自分自身で理解できないという事態は実際に起こりうるし、そのような言説もありえる。そして、「恋の気持ちが分からない」ことを理由に、具体的な人間関係が不確定なままにされることも実際起こりえるものであり、その

ような言説も当然現れるだろう。今の関係が「恋愛」かどうか分からないとして、曖昧なまま放置される関係は、①②でいう「友達以上恋人未満」「友人だけどセックスする」といった関係と、根底でつながっている。

④他にもいい人がいる

ここでは、恋人のいる人が「他にもいい人がいるのではないか」という期待を常に持ってしまう例を挙げる。

＊【ほかに好きな人ができたわけじゃないけど、周りの男の人を見て、彼よりももっと合いそうな人がいるんじゃないかとも思いました。】（女性誌）

＊【彼は性格はいいし、私のわがままも許してくれる人。こんなに自分のことを思ってくれる人はそうはいないと思いつつも…つまらなさを感じ…（中略）…『私にはもっとかっこいい人が』とか『この人だけでは私は終わらない』とかんがえるように】なる。

＊【彼は、はっきり言って、全然かっこよくありません…私、自分で言うのも何ですが、周りから『美人だね』って言われる…『この人より、もっとかっこいい人がいるんじゃないか』って思っちゃって。…彼に会うと『好きだなー』って強く思うんですよ。でも、このままでいいのかなー、とも思うんです。】（女性誌）

＊彼女は恋人がいるが、他にも気に入った男性がいる。【恋愛の始まりのようなドキドキ気分がうれしい反面、カレのことを考えると悪くて。】（女性誌）

この言説の語り手達は、恋人と別れないまま、【もっといい人がいるかもしれない】と迷う。しかも、このどっちつかずの状態を厭うよりは、むしろ、楽しんでいるように思われる。【恋愛の始まりのようなドキドキ気分】を味わうのだから。また、このようなどっちつかずの情況にいる人は、以下のように語る。

＊【この現状を打破するのは、強烈な人との巡り会いしかない】（女性誌）。

このように、恋人とは違う【強烈な人】との出会いを夢見ていることも分かる。だが、それは、ありえない出会いであろう。なぜなら、仮にそう思える「強烈な人」と出会っても、その後は同じ不満が繰り返される可能性が高いからである。

つまり、「他にもいい人がいる」というのは、具体的に「より好きな人」がいるということではなく、空想上の「よりよい」相手を夢見て、現実の関係を仮の関係と措定することなのである。

⑤浮気

ここでは、九〇年代の言説の特徴を見ているのであるが、それをより明確化するために、⑤浮気⑥さりげなさ・回りくどさにおいては、一九八〇年の記事の抜粋を《……》で示し、比較参照する（注

3参照)。

第一に、八〇年の浮気に関する言説では、浮気をする男性と女性二人という三者構造をとることが多いのに対して、九〇年代の言説では、登場人物は三者だけとは限らないし(何人もと浮気したりカップルのお互いが浮気したりする)、浮気するのも男性とも限らない。

第二に、八〇年では、浮気相手が本来の彼女よりも優れた点を持つが、もとの彼女が「忍耐」と「母性的な愛」をもって彼の浮気に耐え、再び愛を勝ち得るとされている。木村涼子(一九九三)によれば、少女向け恋愛小説では、主人公である「良い女の子(the good girl)」とそのライバルとなる「その他の女の子(the other girl)」がおり、後者は美しく、自信を持った自己主張の強いタイプであるという。八〇年の雑誌上でも、ライバル(浮気相手)も《美人》《頭の回転も速く》《発展家》《派手》《私より格段に大人っぽい》などと記されており、もとの彼女は《すべてを包容し》て信じながら《待つ》のであり、帰ってきた彼を《許す》のである。その一方で、九〇年代では、再び愛を勝ち得ることが「良い」とされているわけではなく、別れようとつき合い続けようと、それは本人たちの自由であるとされている。

第三に、八〇年では、浮気された側である女性の感情を詳しく記述している。それは《悔しくて、恐ろしくて》、《路上で声をあげて泣いて》、《半狂乱》になるほどの苦しみである。だが、九〇年代では、女性(あるいは男性)の苦しみを描くことよりも、対処方法(いわゆるハウ・ツー)に重点が置かれている。特に、女性が男性に浮気された場合、忍耐と母性的な愛を持って待つのが対処方法ではない。例えば、それは【女性の方も浮気すればいい】【許すも別れるもどっちも選んでよい】という同等性を強調した対処法なのである。

以上のように、浮気に関する言説は大きく変化している。八〇年のそれは「苦しみ」を表しているのに対して、九〇年代の浮気に関する言説は、(特に女性が)苦しむものでもなければ、恋人が帰ってくるのを待つものでもない。それは、むしろ、刺激的な「遊び」の領域に入っている。例えば、九〇年代の言説内の浮気の理由は【遊びで】、【交際範囲を広げたい】、【背徳感がいい】、【恋愛の始まりのような気分がうれしい】、【結婚してないから別にかまわない】等である。このような「浮気」は、関係の偶然性であり、「遊戯性」そのものである。

⑥さりげなさ・回りくどさ

九〇年代の男性誌でも女性誌でも、恋愛相手に対する最も効果的なアプローチ方法は、好意をあからさまに伝えるのではなく、【さりげなく】【におわせる】間接的な行動であるとされている。

＊【自分が好きだといった服をよく着てくる】(男性誌)

＊【雨の日に先にバスに乗せてくれる】(女性誌)

このような好意を「におわせる」不確定なやり方は、お互いを傷つけ合わないようにする「相互行為儀礼」（ゴフマン一九五九）と呼べるだろう。しかし、この間接的なアプローチは、「相手を傷つけないための儀礼」以上の意味があるように思われる。アプローチ行為の【さりげなさ】によって、「友達以上恋人未満」の関係をより長く維持することができるからである。未確定な関係の「揺れ」を楽しむための【さりげなさ】ではないだろうか。

＊金銭的又は物質的贈与（プレゼント）を行う場合、【初めに安価な物を渡して落胆させた後に高価な「きちんとした」ものを渡す】のが【ステキ】だという。（男・女性誌）

九〇年代の言説の中では、贈与（プレゼント）という「行為」そのものよりも「演出」を重視するという転倒が起こっている。それとは対照的に、八〇年の記事では《声をかける、意中の人を見つめる》といった単純なアプローチが中心に語られている。何かを贈与する時の「演出」に力を注ぐような、ある種の「回りくどさ」は八〇年の記事には見いだせない。

したがって、八〇年に比べて、九〇年代の恋愛言説は、明らかに「さりげなくて」「回りくどい」恋愛を「楽しんでいる」のである。

(3) 未確定な関係・遊びの関係

以上のように、九〇年代における恋愛の言説は、恋愛関係を未確定（曖昧）なもの、遊び（余裕）のあるものとして描いていた。したがって、現代的恋愛として語られているものは、他者に近づいていくように見えて、その実、近づいてはおらず、他者と最終的に合一することなしに、どこまで近づけるかを試みるような関係である。

5 結語

学術的研究では、恋愛は「他者を求めるプロセスであり、自己のアイデンティティを保証するもの」として語られてきた。それは確かに恋愛の一側面である。ところが、九〇年代の雑誌は、恋愛を人間関係を未確定なままに保ち、そのような関係を楽しむものとして描いていた[10]。それは、単に他者を「求める」というより、他者と自分の間を「揺れる」ものであり、「アイデンティティを保証する」というよりは「アイデンティティを確定しない」ものである。言いかえれば、ここでの恋愛とは「遊戯性」を豊かに持っているものなのである。これは、今までの恋愛言説とは異なるものであろう。

(1) 類似概念について

もちろん、人間同士の固定した関係の回避、あるいは未確定な関係の持つ喜びという仮説に関しては、類似した既存の議論がある。それは、エリクソンの「アイデンティティの危機」、九鬼周像の「いき」、ジンメルの「コケットリー」である。だが、雑誌言説の傾向と、それらの議論とが全く同じものであると考えるのは早計であろう。

①アイデンティティの危機

エリクソン（一九六八）は、我々は自分の確実なアイデンティティに確信が持てない場合、親密な関係から後込みするか、「性的に乱れた」関係を持つかしてしまうと指摘する。この議論に則るなら、現代における恋愛関係は「アイデンティティの拡散」を示していることになる。しかし、エリクソン（一九五九）は「アイデンティティの拡散」を人が青年期に経験する「痛み」として捉えており、そこには、言説での「楽しさ」「余裕」は含まれない。

②粋

九鬼周造（一九七九）によれば、粋とは、三つの契機からなるという。一つは、「媚態」で異性との距離をできる限り接近させつつ一元のものにならないことである。もう一つは「意気地」で、異性に対する自主独立性や反抗のことであり、更にもう一つは「諦め」で、仏教的非現実性に基づいた、執着を離れた無関心のことである。「友達以上恋人未満」という関係は、異性との距離を近づけつつ合一しない関係なので、粋の構成要素の一つである「媚態」と類似する部分もある。しかし、「友達以上恋人未満」は「粋」と明らかに異なる部分も多い。「友達以上恋人未満」には、二人の関係を保留することで人間関係を摩擦の少ない「安全地帯」にしようとする甘えはあっても、自主独立性や反抗の精神である「意気地」は見受けられない。また、この近づきつつ合一しない関係を、ゲーム上の刺激剤として楽しむ気持ちはあっても、執着を離れた無関心である「諦め」からそのような関係をつくるわけではない。したがって、この関係は、九鬼が日本人の民族的存在規定として認識した「粋」とは似た部分はあっても、異なるものである。

③コケットリー

むしろ、ジンメル（一九一九）のコケットリー概念が一番近い。コケットリーとは「イエスとノーの不安定な遊戯、承諾の回り道であるかもしれない拒絶、その後ろに取り消しが立っている承諾」を感じさせるものである。ジンメルはコケットリーの端的な例に、「顔をなかばそむけての、まなじりからの視線」を挙げる。まなじりからの視線は「私が関心を持つのはあなたではない」と語りかけると同時に、「私が本当に関心を持っているのは、あなたに対して。だからこそ私はあちらを向いている」とも語る。この同時的な正と反こそコケットリーなのである。雑誌言説の未確定な関係を楽しむという特徴と、コケットリーはかなり近いといっていい。ただし、ジンメルは、コケットリーを、女性だけが完全になしうるものとする。しかも、コケットリーを示す女性は内面的にはイエスかノーかを決めており「合目的的」であるともいう。すなわち女性は、心の中では関心を向ける対象が決まっていて、いわば戦略的に、「否と諾」を同時に表すというのである。

しかし、雑誌上の未確定な関係の持つ喜びは、男女ともに見られる。そして、内面的にも「諾と否」を決定していない。心の中でも「友達以上恋人未満の関係を居心地よく感じる」、「自分の気持ちが恋かどうか分からない」、「他にもいい人がいるかもしれない」と感じており、内面的にもイエスかノーか決定していないのだ。

(2) 遊び――生の未決定性を快楽にする形式

一方で、九〇年代の恋愛言説における人間の関係性は、関係を未確定なままにし、そのような関係を「遊ぶ」という特徴を有していた。恋愛関係における遊戯性が強調されていると言いかえることもできる。他方で、従来の学術的研究の多くは、恋愛関係の遊戯性については語ってこなかった。また、学術的研究においても、曖昧な関係性については考察されているが、それは本稿で述べている関係と同一のものではない。

では、その遊戯性という特徴は、「現代的で全く新しい」ものだといえるのだろうか。私の答えは否である。そもそも恋愛という関係に遊戯性は存在するのではないだろうか。例えば、ジンメルは愛の本質を「非所有から所有に向かう道に置かれ、この道を進む運動」と捉えている。ジンメルの定義と異なり、雑誌の言説における「恋愛」は非所有から所有に向かう運動だけではなく、逆に所有から非所有に向かう運動も含み込んでいる。だが、ここで最も重要なことは、愛が「運動」であるということなのだ。所有でも、非所有でもない、所有と非所有の間を揺れる運動。相手との合一を目的地点にしているようで、その実、合一に至るまでのプロセス自体が「目的」である運動。これは、恋愛関係がもともともっていた本性の一つなのではないか。この人を好きになるかもしれないという予感も、好きな人に気持ちを受け入れてもらえない哀しみも、つき合っている時に感じる不安も、相手を想うときめきも、到達点を持たない運動そのものであり、遊戯性をもつといえる。

それならば、今までの学術的研究において、恋愛の遊戯性（未確定性）に焦点が当たってこなかったのはなぜだろうか。理由は複数考えられるが、一つには、おそらく、恋愛を「社会システムにおいて何がしかの機能をしているもの」として捉えようとすることにあると思われる。

デュビニョー（一九八〇）は「無償制や偶然や遊び」を「社会システム内で、機能や目的性いっさいから切り離された体験の領野」とし、その領域は「規則的に再生産される既成文化を定義する諸規則と混じり合わない」ものとしている。ここで、恋愛を「再生産される既成文化を定義する諸規則」として捉えれば（そしてもちろんそういった側面は持つのだが）、当然「無償制や偶然や遊び」といった側面には、焦点が当たらなくなる。アンリオ（一九七三）が指摘するように「自然的なものも人間的なものも含めて、とにかくものごとには普遍的必然性があるという公準（要請）に準拠する人にとっては……生きものの行動の中や社会生活の規則的な発現の中に、遊びの余地はありえない」からである（冒頭のフロイトの言葉参照）。

「人間は生殖のため恋愛という関係を生みだした」と考えることと、「恋愛は他者の身体を求める情動から構成される」という言説は、さほど遠くない。また、「恋愛が何か個人や社会にとって役に立っている」と考えれば、「恋愛はアイデンティティを保証していく」とい

う言説もうなずけるものである[11]。

「社会システム内で何らかの機能をしているもの」に焦点を当てようとする学術的研究が、恋愛の遊戯性（未確定性）に注目せず、恋愛の機能や目的を語るのは当然であろう。

そうではなくて、恋愛を「遊び」としても考えれば、恋愛はある意味で「無価値」なものとなる。むろん、それは「無意味である」という意味ではなく、遊びが「非生産的」で「無償」の活動であるという意味である。「遊び」としての恋愛は何も生産しない。ただ消費するだけである。そして非＝真面目で贅沢なものでもある。

確かに、このような恋愛は、不必要で贅沢なものに見えるので、学術的研究が語るには、非＝真面目にすぎると思われるかもしれない。あえて、恋愛の贅沢な側面を論じる必要があるのかと考える人もいるだろう。だが、私が思うに、この所有と非所有の間を揺れる運動は、人間の生に関するものである。遊戯性――――所有と非所有の間、正と反の間、諾と否の間、真面目と不真面目の間の揺れ――は、ジンメル（一九一九）の言葉を借りれば「生の未決定性を快楽にする形式」なのだ。この遊戯の贅沢さの中に、生の形式を豊かにするものが含まれている。我々は、機能や目的といった「合理的なるもの」だけでは生きていける存在ではない。豊かな生の形式において初めて、「人間らしく」生きていける存在なのである[12]。したがって、恋愛関係（の言説）において、遊戯性といった贅沢な側面を忘れたり、無視したりするべきではない。もっと積極的に、より深い考察が求められていると私は考える。

(3)これからの課題

これからの課題として第一に雑誌記事のより古いもの・新しいものをより系統立てて分析することが求められる。第二に実際の恋愛関係を調査することが挙げられる。そして、第三に、本論で説明した以外の、言説のズレを生みだした文化社会的背景を探求していくことが重要である。例えば、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの弱体化や、青年心理の変容を挙げることができるだろう[13]。

注

※本稿は雑誌記事をもとにしているので、ヘテロセクシュアルな恋愛の話だけになっている。

（1）本文中に、「実際の」人間関係と書いたが、それは真実・真理として現実にある人間関係という意味ではない。現実のものと「思われる」人間関係という意味である。私は「実際の」恋愛関係を「調査する」ことの有効性は認めているが、それだけが最も優れた方法だと信じているわけではない。というのも、インタビューにしろアンケートにしろ、インフォーマントは（意図的であれ、無意図的であれ）嘘をつくことがあるし、それらのデータ解釈も研究者の「主観性」から逃れられないからである。したがって、調査で現れてくる恋愛関係が「実際」に現実のもので、恋愛言説の中の人間関係は「架空」のものである、という単純化した意見には賛成しかねる。そして言説の中にも何らかの「現実」は含まれ

ていると信じる。

(2) 分析のための類型を行っていないものを「記事」、行ったものを「言説」と記す。

(3) 本稿で選んだ雑誌が普及し、かつ、九〇年代から距離感のある一九八〇年を選び、その年に出版された『週刊プレイボーイ』一二冊、『ホットドッグプレス』一二冊、『ノンノ』五冊、『アンアン』八冊、『JJ』四冊の計四一冊も併せて調査している。『メンズノンノ』は当時発行されていなかった。恋愛記事は計一四〇頁である。一九八〇年といっても八〇年代の半ばでも後半でもなく、八〇年ちょうどの出版であることから、七〇年代的言説の特徴が強く残っている。このデータは本論にとって重要ではないが、九〇年代の言説の特徴を明確にするために、本文中に何度か引用している。

(4) KJ法とは、質的な類型化の方法。詳細は川喜田二郎『発想法』参照。

(5) 「出会い」「魅力」「アプローチ」「セックス」等に分類された。筆者はこれらの要素の構造的分析も行っている。詳細は拙論「現代的恋愛の諸相」(『社会学評論第一九四号』)参照。

(6) 社会学では「恋愛」を、ロマンティック・ラブ・イデオロギーによって「結婚」と結びついた近代に特有な「制度」であると語ることがある。しかし本稿の目的は、恋愛の「制度」性を暴露することではない。実際に、語られ(あるいは信じられ)ている恋愛言説はどのようなものかを考察することである。

(7) 「アイデンティティとは何か」という問いに答えることはやっかいである。特にアイデンティティを実体的なものとして捉えることは困難を極める。ゴフマンはアイデンティティ・ペグという概念で、アイデンティティが、ある意味で「空虚」であることを示唆しているし、メルッチもセルフを本質的な実体として捉えていない。このように考えると、そもそもアイデンティティは存在するのかどうかすら考えなくてはならない。したがって本稿は、アイデンティティが「実際どのようなものか」を定義することはせず、「恋愛を通してアイデンティティが作られる」という言説の存在を記述するにとどめる。

(8) ただし吉澤は「愛する」対象を恋愛相手に限定して論じているわけではない。

(9) 木村敏によれば、日本人は身近な人との間柄を重視する。西洋人(木村の例はドイツ人)は、神(又はその内在化である良心)に依っており、内的な確かさを持つのに対して、日本人は、身近な人との間柄に依っていて、外的な確かさを必要とするという。その意味において、他者を求める「恋愛」は、特に日本人にとって自分の確からしさを作り出すものとして語られても不思議ではない。

(10) 学術的な言説と雑誌言説はそもそも異なって当たり前ではないかという意見もあるだろう。だが、八〇年の雑誌言説は基本的に学術的言説に沿うものである。

他者を求める情動と関連する八〇年の言説には以下のようなものがある。

＊《お互いに相手を必要としている》

＊《本当に別れようと思いました。でもダメでした。この人と別れたら私は一生後悔すると思ったのです》等。

アイデンティティを保証する契機に関連しする八〇年の言説は以下のようなものだ。

＊《(恋人は)最高の理解者》

＊《愛は、生きる喜びを与えてくれると同時に、苦しみや孤独をもたらします》

＊《（恋人との）めぐり逢いによって私は人生観も人間観も変わり…》

＊《失恋によって自分がひとまわり大きな人間になっていることに気づく》等。

(11) 更に井上俊・山田昌弘らに代表されるように、恋愛は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーによって統制されてしまい、安定的な社会に利用されるという考え方もある。この考えは、恋愛が本来持っている、制度からはみ出してしまう「非機能的な」部分は認知しているが、それでも、その議論は、ロマンティックラブ・イデオロギーが「恋愛からその牙を抜くという機能」（井上）をもつということに焦点を当てており、恋愛の未確定性（非機能的な部分）を強調しているわけではない。

(12) ここで私は、「人間らしく」「豊かな」生とは、「絶対的に善なる」生であると主張しているのではない。むしろ、生が「先天的に確固とした明白な立場をもっているのではないということは、生の問題性の一つ」であり（ジンメル、一九一九、訳書、二二四頁）、悲劇ですらあると思っている。

(13) 青年心理の変容についての私の考えは、天野義智（一九九二）の議論と近い。それは、青年は、異質な他者との関係を避け、一人または特定の他者だけとの「繭化体」を作ると同時に、特定のアイデンティティや関係への固着をも避けるという考えである。

参考文献

天野義智　一九九二　『繭の中のユートピア』　弘文堂

浅野智彦　一九九六　「私という病」　大澤真幸編『社会学のすすめ』筑摩書房

Barthes, R., 1977, *Fragments d' un Discours Amoureux*, Seuil（三好郁郎訳　一九八〇　『恋愛のディスクール・断章』　みすず書房）

Duvignaud, J., 1980, *Le jeu du jue*, Editions Balland（渡辺淳訳　一九八六『遊びの遊び』　法政大学出版会）

Erikson, E., H., 1959, *Identity and The Life Cycle*, W.W. Norton（小此木啓吾訳　一九七三　『自我同一性』　誠信書房）

――――― 1968, Identity――*Youth and Crisis*, W.W. Norton（岩瀬庸理訳　一九七三　『アイデンティティ』　金沢文庫）

Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity*, Stanford

――――― 1992, The Transformation of Intimacy, Stanford（松尾精文、松川昭子訳　一九九五　『親密性の変容』　而立書房）

Goffman, E., 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Dobleday Anchor（石黒毅訳　一九七四　『行為と演技』　誠信書房）

橋爪大三郎　一九九五　『性愛論』　岩波書店

Henriot, J., 1973, *Le jeu*, Presses Universitaires de France（佐藤信夫訳　一九七四　『遊び』　白水社）

井上俊　一九七三　「恋愛結婚の誕生」『死にがいの喪失』　筑摩書房

川喜田二郎　一九九五　『発想法』　中央公論社

木村涼子　一九九三　「少女から女へ」マイケル・W・アップル他編『学校文化への挑戦』　東信堂

九鬼周造　一九七九　『「いき」の構造』　岩波書店

草柳千早　一九九一　「恋愛と社会組織」『ゴフマン世界の再構成』

出版ニュース社　一九九四　『出版年鑑』

Laing, R.,D., 1969, *The Divided Self*, Tavistock（阪本健一・志貴春彦・笠原嘉訳　一九七一　『ひき裂かれた自己』　みすず書房）

Melucci, A., 1996, *The playing Self*, Cambridge University Press

Simmel, G., 1919, *Philosophische Kultur*, Alfred Kroner Verlag（円子修平、

大久保健治訳　一九七六　『文化の哲学』　白水社）
――― 1923, *Fragmente und Aufsatze*, Munchen（土肥美夫、堀田輝明訳　一九七六　『断想』　白水社
Swidler, A., (Bellah, R., N.) , 1985, *Habits of the Heart*, University of California Press（島薗進、中村圭志訳　一九九一　『心の習慣』　みすず書房）
多田道太郎　一九九四　『現代風俗ノート』　筑摩書房
谷本奈穂　一九九七　「人気マンガの魅力の構造」『マス・コミュニケーション研究五一号』日本マス・コミュニケーション学会
――― 一九九七　「メディアと対人コミュニケーション」『情報・メディア・ネットワーク』　関西大学重点領域研究報告書
――― 一九九八　「現代的恋愛の諸相」『社会学評論』　日本社会学会
――― 一九九九　「関係性とセルフアイデンティティ」『ファッション環境』八巻四号　ファッション環境学会
鑪幹八郎　一九九〇　『アイデンティティの心理学』　講談社
山田昌弘　一九九四　『近代家族のゆくえ』　新曜社
――― 一九九二　「ゆらぐ恋愛はどこへいくのか」『ポップカルチャーコミュニケーション』　アクロスブックス
柳父章　一九八二　『翻訳語成立事情』　岩波新書
吉澤夏子　一九九六　「家族の未来」　大澤真幸編『社会学のすすめ』筑摩書房

The Play: The form in which the undecidedness of life makes pleasures

Naho TANIMOTO

We can regard love-romance as the important moments in which we are related to others. This paper analyzes human relations in discourses of love-romance.
In some theories, it is said that they want others and make sure of their identities in relation to love-romance.

Discourses of magazines published in 1992~1994 have the characteristics which differ from those theoretical studies state. One of these characteristics is that they keep themselves away from fixed human relations and get joy from that; in the relations they are wavering between the self and others and not making their identities.

Some existing theories tell 'the play' in not-fixed relations; it is similar to the characteristic in the discourses of magazines, but is not the same. 'The play' is originally one aspect of relationships of love-romance rather than now and new characteristics. According to Simmel, it is 'the form in which the undecidedness of life makes pleasures'.

Therefore I think we should focus on the aspect of the play in love-romance.

Key words

love-romance
discourse
relationship
undecidedness
the play